

「とことん語る”福島事故と原子力の明日”」の第3章の取り纏めにあたって」

若杉和彦

「とことん語る”福島事故と原子力の明日”」の第3章「放射線は怖い？」の取り纏め者の若杉和彦です。この章は、他の章が学生との往復書簡を基にしているのに比べて、少し趣が異なり、一般の人々に読んでもらいたい意図から編集しました。

平成23年3月11日の東北地方の大地震は、その直後に発生した巨大津波とともに、約2万人の死者・行方不明者を出しました。また、それが引き金となって発生した東京電力福島第1原子力発電所の事故は、放射線の影響による死者がゼロ、重篤な健康障害の発症がないにも拘わらず、その社会的影響は福島地方を中心に全国規模で広がりました。原因は結局「放射線が怖い」の一言に尽きます。往復書簡に参加した学生達は、放射線や放射能のイロハを既に知っていますので、今さら往復書簡で質問することもなかったのです。

そこで往復書簡の執筆者達は、集まっていろいろ考えました。もともと往復書簡をまとめて出版する目的は、対象が学生達だけに留まらず、一般の人々に大切なエネルギーや原子力を正確に理解してもらうことにあります。しかし現状は、福島の方々が避難生活で苦しんでおられる、東京の主婦が東北産の野菜は食べてもいいのかと心配しておられる。子供を育てているお母さん達は外で子供を遊ばせられずに困っています。この大きな影響の中で、放射線のことを説明する章がないのは片手落ちではないかと考え、第3章が生まれました。従って、ここでは学生達からの質問にとらわれず、一般の方々が知りたいこと、正確な知識があれば少しは心安らかに過ごせるのではないかといった視点を重視しました。

その趣旨に沿い、この章では原子力を勉強していない一般の方々に理解してもらえるよう、出来るだけ分かり易く、難解な専門用語を使わず、放射線や放射能の安全の基本を解説しました。簡単に結論から言えば、放射線や放射能は昔から自然界に存在し、福島原発事故の有無に拘わらず、私たちは毎日放射能を含んだ食べ物を食べていますので、特別怖いものではないのです。むしろ放射線や放射能が皆無な世界は地球上にはありません。放射線を正しく知り、正しく怖がるべきです。このことを理解してもらうため、まず私たちは自分の体の中にどれくらいの放射能を持っているのかを説明し、福島ではどれくらいの放射線被ばくがあったのか、あのチェルノブイリ原発事故と比べてどうなのか、被ばくはどの程度までなら心配なくていいのか、避難のために定められた基準は妥当なのか、除染はどこまで必要なのか、低線量被ばくはむしろ体に良いと言われるが本当なのか等について、夫々執筆者を決めてまとめました。

内容を読んでいただければ気付かれると思いますが、私たちは当時の政府が決めた放射線被ばくに関する避難基準や食品安全基準は世界の基準と比較しても厳し過ぎると思っています。放射線のためには死ななくても、避難生活が長く続いたために

体調不良となり、職を失い、故郷を失い、多数の自殺者まで出ました。厳し過ぎる食品安全基準を定めたために、東北地方の農水産物が売れなくて多くの農家や漁師が困っています。放射線防護の国際機関であるICRPは、安全基準はそれを定めたために発生する不利益や犠牲が過大にならないようにしなければならないとしています。皆様が第3章を読まれて、「放射線は怖い？」をまとめた私達の当初の意図が伝えられれば、大変うれしく思います。

以上